

アーネスト・サトウと日本語研究

— 『会話篇』を中心に—

Ernest M. Satow and His Japanese Studies

— Focusing on “*KUAIWA HEN*” —

金沢朱美
(Akemi KANAZAWA)

キーワード：日本語書記官、『会話篇』、『一外交官の見た明治維新』、日本語書簡

Key Words：Japanese Secretary, “Kuaiwa Hen”, “A Diplomat in Japan”,
Satow’s letters in Japanese

1. はじめに

アーネスト・サトウ (Ernest M. Satow, 1843-1929) は、1862年江戸在勤の通訳生として来日した。1865年、日本語通訳官になり、1868年に日本語書記官に昇進する。通算25年に亘り日本に滞在し、日本語が極めて堪能になり、第一級の日本学者と評価されるようになる。本稿では、『*KUAIWA HEN*』(以下、『会話篇』)を中心にサトウの回想録『一外交官の見た明治維新』(原題 “A Diplomat in Japan” 1921)等の著作、さらには妻武田兼や息子久吉への日本語書簡を通してサトウの日本語学習や日本語研究について考察する。

2. 『一外交官の見た明治維新』から知られる1860年代における外国人の日本語習得の状況

サトウが来日した1862年当時の、外国人の間における日本語の習得状況及び日本人の間における英語の習得状況に関してサトウは次のように記述している。

通話の際には、口頭、文書のいずれによるも、常にオランダ語を媒介としていた。これは、英語を知っている日本人がまだほとんどなく、日本語を話せる外国人も片手の指で数えるほどしかなかったからだ。しかし、だれもが、少しはその心得があると思っていたのである。

商用のための一種の私生児的な言葉が案出されていたのだ。中でも、マレー語の駄目(ペケ) *peggi*、破毀(サランパン)は大きな役をつとめ、それに「アナタ」と「アリマス」とを付け加えて、自分は複雑な取引をやる資格を持っていると、銘々がそう思い込んでいた。この新造語の著しい特徴は、対話者相互の社会的地位を示す日本語のはなはだしい多様性と動詞の複雑な変化がないことである。それはもちろん、居留地以外には通用しな

かったが、ヨーロッパ人がそれを用いたことは、日本人の外国人に対する態度の特徴である「夷荻」軽侮の感情に少なからず役立ったにちがいないと思われる⁽¹⁾。

と述べ、当時、横浜居留地で使われていたピジン日本語である“Yokohama Dialect”⁽²⁾について言及している。ここからも当時、外国人の間で標準日本語の習得がほとんどなされていなかったことが知られる。

サトウが記述しているように、当時、日本政府との通信はオランダ語で行われ、オランダ語は日本人に知られていた唯一のヨーロッパ語であったから、オランダ語の通事たちは「大変割りのよい報酬を得ていた。」サトウは、「日本語を読み、書き、話すことを覚えて、これらの仲介者に取って代わろうというのが、私の野望であったことはいうまでもない⁽³⁾。」と記している。

3. サトウの初期の日本語学習状況

当時の駐日イギリス公使オールコックの考えによれば、通訳生に必要とされた能力は日本語の口語ではなくむしろ文語であった。日本語の文語の基礎は漢文であり、漢字であるから、3000-4000の漢字を知っていれば、日本語の文章を読むことは容易になるという発想で、通訳生の最初の訓練は中国北京で行うべきであるという考えのもとに、サトウは先ず中国に送られた。しかし、サトウの考えは日本語の通訳官になるのに先ず中国語を学ぶことは役に立たないという意見であった⁽⁴⁾。結果として、中国に到着後7か月でサトウは来日する。

サトウは、たくさんの日本語の教師について日本語を学んだ。後年、口語日本語のみならず、文語日本語能力も極めて優れたものになり、文語のさまざまな文体に深い造詣を有するようになり、侍の辞世の和歌を散文体に英訳することもできるようになった。日本語教師に関して、サトウは、資質ある教師に対しては「教師」として評価しているが、気に入らない場合は「愚鈍でほとんど役に立たなかった」などと切り捨てている。日本語教師は、通訳官、翻訳官としてサトウが一人立ちするようになり、日本語書記官になった後も常に傍に付いていたことが同書によってわかる。

断わっておくが、「教師」と言っても「教える」ことのできる人をさすのではない。日本でも北京でも、当時の私たちは一語も英語を知らぬその国の人間を相手にして勉強したのである。文章の意味を知る方法は、小説家のポーが「黄金虫」の中で暗号文の判読について述べているのと、ほとんど同様のものであった。私の「給仕」も英語を知らなかったが、私はこの給仕の世話で、以前は医者であったが、現在遊んでいるから無報酬で日本語を教えようという男に来てもらった。われわれは、最初は漢字を書きくませて、互いに双方の思いを通じ合った。この男の書いた最初の文章の一句を記せば、「君愛衆人、我亦敬君如主」というのであった。私はあとになって、この君（プリンス）は汝（ユー）の丁寧な言い方に過ぎないと推察した⁽⁵⁾。

1862年当時、サトウがいかに日本語学習に苦労したかは、上述の記事からも窺えるが、日本

語学習の手引書もほとんどなく、また、あっても日本では手に入らなかったと次のように述べていることからわかる。

J・リギンス師の書いた、長崎の方言のわずかな語句しかない薄いパンフレットや、ウィリアム・メダースト（兄の方）の編纂で何年も前にバタヴィアで刊行された単語集、ランドレス編のロドリゲス日本文典、オランダ語で書かれたドンケル・クルチウスとホフマン共著の文法、レオン・パジェスによる同著のフランス語訳、同氏による1603年の日葡辞典の一部訳、ホフマンの日蘭英会話書、ロニイの日本語入門など、そんなものがあるに過ぎなかった⁽⁶⁾。

サトウは口語を勉強するために、ブラウン（Brown）『会話体日本語』（原題“Colloquial Japanese” 1863）を直接、ブラウンから習った。ブラウンの日本語教授は「大いに役に立った」。文語は、ブラウンと一緒に『鳩翁道話』の初めの部分を読んだ。書簡文は高岡要という日本人から学んだ。書簡文の知識は後に非常に役に立ったとあるが、後年、西郷隆盛らの書簡文を英語に訳している。

高岡の指導法とサトウの学習法について、サトウは以下のように記している。

彼は、草書で短い手紙を書き、これを楷書に書き直して、その意味を私に説明した。私はその英訳文を作り、数日間はそのままにして置いて、その間に原文の写しのあちこちを読む練習をした。それから、私の英訳文を取り出して、記憶をたどりながら、それを日本語に訳し直した⁽⁷⁾。

上述の方法がいかに効果的であったか、サトウは学校時代の教科書や実践者の名前を挙げて力説している。実際、サトウは短期間で翻訳・通訳能力を身につけ、後に將軍慶喜の通訳や王政復古の国書を英訳することになる。また、後年、妻武田兼や息子に宛てて多くの日本語書簡を候文で認めて、海外の赴任地から送っている。

書道は高齋単山ほかから学んだが、三度も流儀を変えたために少しも上達せず、普通の日本人ほどにも書けなかったと述べている。

4. 『会話篇』の考察

4. 1. 成立

サトウは1873年、横浜において『会話篇』を出版したが、『会話篇』は1867年から1868年にかけて、同僚のミットフォードのために編纂されたものである。サトウは、前掲書に次のように認めている。

ミットフォードは、彼が以前に北京でシナ語を勉強した時のように、絶えず日本語の勉強に没頭して、著しい進歩をみた。私は、彼の役に立てようと思って、一連の文章と対話を編纂しはじめたが、これは数年後に会話篇という標題で出版された⁽⁸⁾。

ミットフォードは、この国へ来てからまだ12か月以上たっただけなのに、だれの助

けも借りずに日本語で会話をやってのけることができた。それは、同君が語学力を有していた著しい証拠である⁽⁹⁾。

『会話篇』は3部に分かれており、第1部は、左のページでさまざまな場面による会話文を25課に分けて紹介している。右のページでは英語の訳が付されている。第2部は会話文に紹介されている語彙の詳細な説明を記述している。序文によると、Takayanagi Tenjo、Ono Seigoro、ミットフォードの日本語教師である長沢彦太郎ら、多くの母語話者の手助けを借りて編纂された。第2部の文法の記述に関してはアストン (Aston) の『日本口語小文典』(原題 “A Short Grammar of the Japanese Spoken Language” 1869) から、その理論を援用し、アストンに非常に多くを負っていると述べている。1873年にサトウの教師である Taguchi Mikaomi の助力で改訂増補版が作成された。第3部は会話文をかな書きにしている。

4. 2. 考察

第1部第1課は “Coming and Going” とあり、1. Kino kimashita 2. Kino kita. 3. Ashita iko to omo. 4. Ashita iko ka to omo. 5. Mo sukoshi nochi ui o ide nasai.⁽¹⁰⁾ 6. Ano onna wa sakujitsu ikimashita. 7. Kino itta. 8. Mairimasho ka. のように例文が配置されている。1課は40の例文から構成されているが、例文が先ず、過去形から始まっているのが特徴的である。1は丁寧体の過去形、2は普通体の過去形、3、4は意向形を伴った普通体の現在形、5は丁寧な命令形、6は丁寧体の過去形、7は普通体の過去形、8は丁寧体の勧誘を表す。「ます」形は丁寧体を表す基本形であるが、40文のどこにも「ます」を伴った丁寧体の現在形が紹介されていないのである。2課の “Buying and Selling” における4に初めて、mairimasu の形で「ます形」が提出される。2課で「ます形」が提出されるのは、4. mairimasu、10. gozaimasu (2回)、15. gozaimasu、38. gozaimasu、39. makemasuのみである。

『会話篇』は主従の関係における対話を中心とした状況が多く設定されているために、従者の返答には「ごぞいます」が多く、主の日本語は極めて尊大である。6課のように1. Kiite kuru ga ii. 2. Kiite koi. とぞんざいな口調や命令形が多く、それに対して、3. Kiite okimasho. 4. Kiite mairimasho. 5. Kiite kimasho. と丁寧な返事が多い。全体として江戸口語の非常に自然な表現が豊富に紹介されている。1873年刊行であるから、後述する武田兼と既に家庭を持っており、丁寧な女性の言葉かと思える部分は兼からも表現上、教示を得たかもしれない。

サトウには実際、会津藩の侍であった野口富蔵を初めとして、ほかに50年近くサトウに仕えた本間三郎や護衛の者など、日本人の従者が常に身の回りにいたので、日常生活の口語として必要な日本語は『会話篇』に見られるような主従の日本語であったのであろう。自分から「ます形」を使って話すことは、日常生活にはあまりなかったのかもしれないが、それにしても教科書としては過去形から始めるのは普通ではないといえる。

同年 (1873) に出た馬場辰猪『日本文典初歩』(原題 “An Elementary Grammar of the Japanese Language”) において、現在形として例文が Watakushi wa ik-imasu から始まってい

るのと比較しても、『会話篇』が1課：丁寧体過去肯定形、2課：普通体過去肯定形、3課：丁寧体現在否定形、4課：召使からの挨拶表現、5課：召使への罵り（1. Nani wo uji-uji shite i-yagaru d aro ne; hayaku konai ka.）等から始まっているのは、サトウの優れた日本語能力とは別に、教科書としては文法項目の導入順序に問題が多いといえる。教科書というよりも江戸口語の表現集と評価する方がふさわしい。

教科書としてはやはり会話体を整理して過去形からではなく、「ます形」から提出するのであれば現在肯定形から例文を配置するのが妥当ではないか。第1部の単語や語句、表現の配置は、文法的な習得順序における易から難へと合理的に並べたのではなく、ある状況設定において使用される可能性のある表現を思いつくままに羅列したかのようであり、体系的とはいえない。

第1部に表われる表現については、課が進むにつれて日本語として非常にこなれた難易度の高い表現が取捨選択なく提出されている。21課（Discussion between a Foreign Consul and a Japanese Official on a Broken Contract）では、商人の取引における約定違えの訴訟について、一人の発話が22行にも及ぶ長大で複雑な内容を、双方、非常に丁寧な日本語で話し合う状況が設定されている。21課等は単なる会話例文の紹介というよりも超級の談話の手本というべきもので難易度は極めて高いといえる。22課はまた、季節・時候の会話を紹介する短文の表現集に戻っているのである。

外国人学習者のためにあえて不自然な日本語を提出することなく、当時の、全く自然な口語による発話のさまざまな状況を難易度の配慮なく網羅しているのではあるが、ミットフォードのような来日1年以内の学習者が手本として使うには、『会話篇』は使いにくく、また、難易度が高すぎるテキストであると思われる。『会話篇』は問答式で成り立っている箇所が多いが、同年に刊行された馬場辰猪『日本文典初歩』に見られるいわゆる「ドリル」式の基礎的な文法項目や語彙習得のための練習例文が少しも入っておらず、手本の談話例がテーマによって配置されているだけだからである。

サトウ自身が前掲書で語っているように、『会話篇』の考察からも、自身が学習したときに日本国内には適切な日本語の教科書がなく、教師も教師と呼べるような教授法を身につけた日本人がおらず、易から難への適切な学習順序もなく日本語を習得しなければならなかったということが窺えるのである。

一方、第2部の文法説明は詳述されており、独習者にもわかりやすい。援用したというアストンの、動詞の分類法も活用についての理論もわかりやすい。現在の日本語教育と同じ範疇で動詞は3グループに分類されており、外国人学習者向けの斬新な方法を用いている。

試みに第2部における、第1課1の例文「Kino kimashita.」のkimashitaについて見ると以下の説明が付されている。

Kimashita; Came. Past Indicative of kimasu, polite form of the irregular verb kuru, to come, formed by adding the old verb masu, to be, to the root ki. Vide paradigms of masu

and kuru. (後略)

アストンの理論を援用したという、語形変化表について以下にikuを例に引用する。アストンの語形変化表(1869、初版)(1871、第2版)⁽¹¹⁾もほぼ同じであるが、サトウによって記述されている項目の方が更に多い。

PARADIGM OF THE VERB *iku*, to go. I. Conj.

	Root.	iki-
Participle	<i>itte</i> (for <i>iki te</i>)*	going
Indicative Past	<i>itta</i> (for <i>iki ta</i>)*	went, has gone, did go.
Conditional Past	<i>ittara</i> *	if, or when (he went),
	<i>itta nara</i> *	or has gone.
*These forms are irregular. In all other verbs of the first conjugation ending in <i>ki</i> the <i>k</i> is simply dropped, as <i>kaite</i> for <i>kakite</i> , from <i>kaku</i> , write.		
Probable Past	<i>ittaro</i> *	(he) probably has gone, etc.
Concessive Past	<i>ittaredo</i> *	though (he) went,
	<i>Ittakeredo</i> *	has gone, did go.
Frequentative Past	<i>ittari</i> *	going.
Desiderative Adj.	<i>iki-tai</i>	wishes to go.
<hr/>		
Negative Base.	<i>ika-</i>	
<hr/>		
Neg. Indic. Pres.	<i>ika-nu</i>	goes not, has not gone,
	<i>ika-nai</i>	<i>will not go.</i>
Neg. Indic. Past	<i>ika-nanda</i>	went not.
	<i>ika-nakatta</i>	
Neg. Prob. Past	<i>ika-nandaro</i>	probably did not go.
	<i>ika-nakattaro</i>	
Neg. Cond. Pres	<i>ika-neba</i>	if (he) does not go.
	<i>ika-nakereba</i>	
Neg. Cond. Past	<i>ika-nandara</i>	if (he) did or, should not go.
	<i>ika-nakattara</i>	
Neg. Conc. Pres	<i>ika-nedo</i>	though (he) goes not.

	<i>ika-nai keredo</i>	
Neg. Participle	<i>ika-zu shite</i>	
	<i>ika-nakute</i>	
	<i>ika-nai de</i>	
<i>Future</i>	<i>iko (for ika-u)</i>	<i>will go.</i>
<hr/>		
Indicative Present	<i>iku</i>	goes.
<hr/>		
Negative Future	<i>iku-mai</i>	will not go.
Negative Imperative	<i>iku-na</i>	do not go!
<hr/>		
Conditional Base	<i>ike-</i>	
<hr/>		
Conditional Pres	<i>ike-ba</i>	if (he) goes.
Concessive Pres	<i>ike-do</i>	though (he) goes.
	<i>iku keredo</i>	
Imperative	<i>ike</i>	go!

サトウに影響を与えたアストンは口語動詞の分類について3分類あるとする。第一活用形（語根形が*i*で終わる。現在の国語教育での五段活用、現在の日本語教育でのIグループ）、第二活用形（語根形が*e / i*で終わる。現在の国語教育での下一段、上一段、現在の日本語教育でのIIグループ）、不規則動詞*ki, shi, shini*、（現在の国語教育でのカ変、サ変、および文語動詞のナ変。カ変、サ変は現在の日本語教育でのIIIグループ。）と分類するところはナ変を除いて現在の日本語教育と同じである。

アストンやサトウらの動詞の扱いから、欧米系外国人学習者の間では日本語の動詞を現在の、中国人、韓国人学習者を除く日本語教育における分類と同じく、Iグループ、IIグループ、IIIグループと分類することが当時においてもなされていたことがわかる。また、後続の部分は意味機能によって分類しているところも今日の日本語教育の教科書と同様である。同年（1873）に出版された、前述の、馬場辰猪『日本文典初歩』も口語文典を扱った教科書であるが、動詞の分類においてはサトウと同じ3分類法を採っており、馬場辰猪のような英語を手段として“Cognitive Academic Language Proficiency”⁽¹²⁾（認知・学習言語能力）を培った人の分析方法として興味深い。

ただし、サトウ自身が母語話者のさまざまな日本人から日本語を学んだときは、動詞のこのような分類法で学習しなかったのはいうまでもないことであろうし、サトウの師であるブラウンの『会話体日本語』でも規則動詞と不規則動詞に分類しているものの、四段動詞（現在の国

語教育での五段活用動詞)を不規則動詞群としており、未だアストンのように整理されていなかったのである。

5. 妻武田兼・息子への日本語書簡について

サトウは1884年、バンコク駐在代表兼総領事に任命され、日本語書記官としての日本での赴任を終えた。サトウには日本人の妻武田兼がいて、1873年、長女が1歳5ヶ月で死去している。ほかに長男栄太郎と次男久吉がいた。『一外交官の見た明治維新』の訳者坂田精一は、1960年、サトウの略伝において、「彼は、その生涯を独身でおし通し・・・」と書いているが、次男の武田久吉が1962年に「父サー アーネスト・サトウを語る」⁽¹³⁾を講演し、萩原延壽は『旅立ち・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』(1998)においてサトウの日本の家族に言及している。

武田家から横浜開港資料館に寄贈され、最近公開された、サトウから武田兼や息子に宛てた多くの日本語書簡は、サトウの、日本の家族に対する責任感や日本の家族との絆の強さを語っているが、サトウの日記には兼のことは多くは語られていない。サトウの日記における息子の名前の初出は1884年である。バンコク赴任から日本へ一時静養に戻って来たときの10月6日の日記には次のように日本語で記されているという(原典ローマ字)。

ヒルゴ、コドモヲミニイッタラ、フタリトモソウケンデ、オトナシクテ、メズラシイ。
エイタロウハ、イッサクネンヨリ、カクベツセイガノビナイ。チエガツイタ。ヒサキチ、
イロシロク、ワガオトウト、セオドーアニヨクニタリ⁽¹⁴⁾

1906年、サトウは隠退することになり、帰国途上に北京から東京に立ち寄るが、東京出発の前日のサトウの日記には、「6月8日 もういちどo・k・と久吉に別れを告げにゆく。」と記されているという⁽¹⁵⁾。

『一外交官の見た明治維新』を通して、サトウは剛胆無比の人であり、抜群の実務能力を有していたことがよくわかるが、一方で萩原の『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』やその他の文献からも、サトウはタイから休暇で来日したときであっても日本の家族の家に滞在せず、家族とずっと時間を共に過ごすような人ではなかったことが窺える。また、当時はお雇い外国人としての就職の機会も多くあったが、サトウには将来、日本に永住して日本語・日本語研究をしようというような気持ちも全くなかったことは、78歳で出版した回想録の下記の記述からも窺える。

どんなに高い地位を与えられても、日本人から給料を受けるのは私の好むところではなかったから、私は女王陛下の治めたもうイギリス帝国の官吏をやめた場合でも、日本で職業を求めることはしまいと決心していたのだ⁽¹⁶⁾。

米国へ移住した長男の栄太郎からの、兼宛の書簡にも次のようにあり、サトウの気持ちを訝り母を案じている。

しかし、母上様も誠に御気の毒。何不足はないし楽だと云ふのは外から見た目で、御自身ではさぞ御さみしい事、男か家に居らぬからなど、ご心配も一とほりの事では無之と存

じます。母上様の事はどう御思召すと御うかがひ申さうと存じましたが、久吉にも札幌へ行けとすゝめられたと申され候へは、母上様の事については行々の事も十分に考へられてある事と、其事については一言も申しませんでした。(後略)⁽¹⁷⁾

札幌は北海道帝大のことである。

しかし、当時、サトウに日本の家族がいたことはかなり世間に知られていたのではあるだろうか。明治29年(1896)4月22日の朝日新聞によると、「サトウ夫人の腕輪」と題して、腕輪を落としたサトウ夫人の許に英国公使官へ届けられた腕輪が無事に戻ってきたことを報じている。サトウは1895年5月より日本駐劄特命全権公使に任命された。当該記事には、「麹町1番町なる英国公使サトウ氏」とあり、夫人の個人名は書かれていないが、武田兼のことであると考えられる。サトウが兼のために購入した2軒目の家も、海外からの兼宛書簡の宛先によると麹町区富士見町4丁目6番地にあった。

横浜開港資料館に保管される、サトウより兼もしくは息子に宛てた日本語書簡は、サトウが南米・ウルグアイのモンテビデオに赴任中の書簡から始まっている。稿者は、公開予定はあったものの、いまだ未公開であったときに横浜開港資料館のご好意で原書簡を見せていただき、マイクロフィルムに撮っていただいた。文書番号1の書簡は、封筒に「明治廿三年(1890)十一月九日請取」と記されている。原文からはサトウの卓越した日本語能力とともに、兼から距離を置いた実際の行動とは異なった家庭的な温かい一面が窺える。

貴御手紙このあひた請取申候扱おとつさんのゐる所どんな所かとの御たづねハ先うみべにて拾七万人の大都会に有之候家は皆れんがにて或ハ二楷^(ママ)或ハ三楷有之又往来はますぐにて全く(一字不明)枚に相似て居候東京と同く乗相馬車^(ママ)沢山御座候私の家は港に近くにわハ無之去共屋根の上は平にてゴクあつ時は夫に運動致候此国は大木少ク其代りに草花沢山有又つばきは沢山なくは日本とたいて同あつさなれ共冬は甚ださむき事無御座候此国のことばいすばにやのことばにて日本のことばと全く違ふ久吉はおほきくなったら英語を御まなびなされ又おとつさん留守中はおつかさまめを大事に致し好く御咄しを御聞なされ先御返事追候

八月十五日

父エルネスト・サトウ

久吉へ

イギリスに隠遁して日本語を忘却しつつあったのだろうか、晩年の81歳と82歳のときに兼に宛てた書簡は“My dear Kane,”(1924年2月17日付)、「Koishiki Okane San」(1925年2月14日付)と始まっており、地震の心配をしたり、子供への遺産分けのことなど、英文で細やかな手紙を綴っている。

6. おわりに

サトウは外交官という職業の傍ら、日本・日本語の研究を続け、日本学者としても名を残した。

サトウ自身は大変な苦勞をして多くの「日本語教師」からさまざまな方法で日本語を習得した。教授法も日本語の知識も定かでなかった「教師」たちから習ったにもかかわらず、正確に口語も文語も習得したサトウの言語能力の高さが窺える。

サトウは後進の日本語学習者のためにもさまざまな著作物を残した。サトウの編纂した『会話篇』には、自然な江戸語での表現が豊富に紹介されていて、かなり日本語の学習が進んだ外国人には役に立つテキストであると思われる。一方、初心者にとっては第2部の文法解説書は懇切丁寧であるといえるが、同年に出た馬場辰猪『日本文典初歩』と比較すると、いわゆる「ドリル」式の練習題もなく、使用するに難しいテキストではないかと判断される。しかし、今日の日本語教育における動詞の3分類法と同様の動詞の3分類法の採用は、外国人日本語学習者にとって日本語の動詞の活用に対する理解と習得を極めて効果的に促進する方法で、アストンや馬場辰猪の分類法とともに斬新な方法であると高く評価できる。

『会話篇』以外にも、サトウは日本アジア協会で研究発表をしたり、『英和口語辞典』を編纂したり、多くの業績を残した。日本語学習ならびに研究の面でサトウに影響を与えたブラウンやアストンやヘボン (J.C.Hepburn) やホフマン (J.Hoffmann) ら外国人日本語研究者の系譜上において相互の影響関係を辿っていくことが、『会話篇』の更なる考察とともに今後の課題である。

謝辞：

横浜開港資料館には貴重なアーネスト・サトウの書簡原典を閲覧させていただきました。

武田久吉宛日本語書簡を解説するにあたり、元目白大学教授・秋山高志先生に貴重なご教示を賜りました。ここに記して心から御礼申し上げます。

【註】

- (1) アーネスト・サトウ著・坂田精一訳 (1960) 『一外交官の見た明治維新』 上、21-22頁、岩波書店
- (2) 金沢朱美 (2005) 「幕末明治期の居留地における日本語についての考察—Yokohama Dialectを中心に—」 『日本語学論説資料』 40巻
- (3) サトウ前掲書、上、68頁
- (4) 萩原延壽 (1998) 『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』 1、110-113頁、朝日新聞社
- (5) サトウ前掲書、上、66-67頁
- (6) サトウ前掲書、上、65頁
- (7) サトウ前掲書、上、68頁

- (8) サトウ前掲書、上、249頁
 (9) サトウ前掲書、下、84頁
 (10) 正誤表に Exercise 1 No.5 for ui read ni とある。
 (11) 渡邊修 (1982) 「資料紹介・アストン『日本語口語文典』—初版影印—解説」大妻女子大学文学部紀要における影印本は初版 (1869) であり、ほかに Aston (1871) “A Short Grammar of the Japanese Spoken Language”, Second Edition Belfast を参照した。
 (12) Cummins (1979) Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children
 (13) 武田久吉 (1962) 「父サーアーネストサトウを語る」『明治維新と英国』日英協会
 (14) 萩原延壽 (2001) 『離日・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』303頁、朝日新聞社
 (15) 萩原延壽 (1998) 『旅立ち・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』51頁、朝日新聞社
 (16) サトウ前掲書、下、89頁
 (17) 萩原延壽 (1998) 『旅立ち・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』55-56頁、朝日新聞社

【文献】

Aston, W.G. (1871) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language, Second Edition, Belfast*

Satow, A.M. (1873) *KUAIWA HEN Vol.1.2.3, Yokohama*

上田万年 (1890) 「欧米人の日本言語学に対する事跡の一二」『上田万年集』184-188頁

サトウ、アーネスト著・坂田精一訳 (1960) 『一外交官の見た明治維新』上下、岩波書店

サトウ、エルネスト筆武田久吉宛日本語書簡 明治23年 (1890) 8月15日付

サトウ、エルネスト筆武田兼宛英語書簡 大正13年 (1924) 2月17日付

サトウ、エルネスト筆武田兼宛英語書簡 大正14年 (1925) 2月14日付

萩原延壽 (1998) 『旅立ち・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社

萩原延壽 (2001) 『離日・遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社

馬場辰猪 (1873) *The Elementary grammar of the Japanese Language* Trubner and co., London

横浜開港資料館編 (2001) 『アーネスト・サトウ』有隣堂

渡邊修 (1982) 「資料紹介 アストン『日本語口語文典』—初版影印—解説」大妻女子大学文学部紀要